

物語を変体仮名で読むために

目次

1	概説——漢字と仮名	2	1	担当	半沢幹一
2	概説——いろは歌と変体仮名	7	7	担当	半沢幹一
3	概説——仮名文字と仮名文学	12	12	担当	半沢幹一
4	概説——平安時代の物語史	17	17	担当	岡田ひろみ
5	概説——平安時代の本	22	22	担当	岡田ひろみ
6	変体仮名を読む——『竹取物語』上巻第一段詞書①	24	24	担当	山本聡美・咲本英恵
7	変体仮名を読む——『竹取物語』上巻第一段詞書②	28	28	担当	山本聡美・咲本英恵
8	物語の絵画化——テキストとイメージ	32	32	担当	山本聡美
9	変体仮名を読む——『伊勢物語』初段	34	34	担当	岡田ひろみ
10	変体仮名を読む——『伊勢物語』三段	38	38	担当	岡田ひろみ
11	変体仮名を読む——『伊勢物語』五段	40	40	担当	咲本英恵
12	変体仮名を読む——『伊勢物語』六段	44	44	担当	咲本英恵
13	練習問題	50	50	担当	内田保廣・岡田ひろみ・咲本英恵
14	付録	54	54	担当	岡田ひろみ
15	補助教材の使い方	57	57	担当	内田保廣・咲本英恵

物語を変体仮名で読むために

1 概説―漢字と仮名

〔文字〕

ことばは、形式と意味の両面をもつ。その形式の実現媒体には、音声と文字の二種類がある。どちらも、聴覚と視覚という感覚によつて直接、感じ取ることができる。それらをとおして、われわれは意味というものを知ることができるのである。

たとえば、「耳（みみ）」や「目（め）」ということばは、ミミやメという音声、あるいは「みみ」や「め」という文字という形式によつて、〈耳〉や〈目〉という意味を表わしている。この関係自体は、どの言語においても共通する、ことばというものの本質的な特徴である。

音声と文字は、ことばの形式としては同等の役割をはたすが、そのありかたには大きな違いがある。現在、人類が使っている数多くの言語において、音声という形式をもたないものは存在しないが、文字という形式もつのは、そのごく一部でしかない。しかも、その言語固有の文字をもつものとなると、ほんの一握りではない。

電気的な通信機器がない状態でのコミュニケーションを考えると、音声による場合は、当事者同士が同じ時に同じ場所にい

なければ通じない。文字はそのような音声の時間的・空間的な限界を越えるために生み出された。文字を使うことによつて、後の時代の人とも、遠く離れた人ともコミュニケーションができるようになったのである。

ごく一部の言語しか文字という形式をもっていないのは、その言語を使用する社会の文化・文明の発達具合に関係する。つまり、発達すればするほど、より長く、より広く、その文化・文明を伝える必要が生じるからである。世界の四大文明の発祥地と呼ばれる地域の言語にかならずそれぞれ固有の文字が存在するのは、そういう理由による。

したがって、ことばの形式として、文字は、音声よりも後に、社会的コミュニケーションの必要に応じて、作り出されたものである。その際、文字は、音声という聴覚的なものを視覚的なものに写す、つまり文字の一つ一つは音声のそれぞれに対応するものとして整えられた。そういう文字を「表音文字」といい、世界の言語の文字のほとんどはそういう成り立ちである。

また、ことばを構成する音声のほうは、乳幼児のころに、養育者の口伝えによつて、ほぼ無自覚のうちに習得される。それに対して、文字は普通、ある程度の年齢に達してから、しかもそれなりの時間と労力をかけなければ、身に付けることができない。

〔漢字〕

漢字は、中国発祥の文字であり、もともとは中国語固有の文字である。「漢」字と称するのは、中国の紀元前の国名の一つにちなんだものであり、その頃に中国語の文字としての体系ができたことによる。「六書（りくしよ）」と呼ばれる、漢字の成り立ち方による分類が行われたのもその頃であり、象形・指事・会意・形声・転注・仮借の六種類に分けられた。

中国における文字の由来は、甲骨文字といわれる。鹿の角や骨、亀の甲羅などを焼いてできた、その表面のひび割れの文様から、吉凶を占ったのであるが、その文様のパターンが後に文字つまり漢字の起源とみなされた。

中国語の形式として整った漢字は、一般的な表音文字とは大きく異なり、「表語文字」と呼ばれる、世界的にも例外的な文字である。「表語」とは語を表わす、つまりことばの形式と意味の両方を表わすということである。漢字は、形・音・義の三つを表わすといわれるが、「形」が文字、「音」が音声で、両方ともことばの形式のほう、「義」がことばの意味のことであり、つまり漢字はその一つが一つの単語に相当するのである。

たとえば、「耳」や「目」という漢字は、ともに身体の一部としての耳や目の形からできた、いわゆる象形であるが、「耳」や「目」

物語を変体仮名で読むために

はそれ自体として、文字という形式を示すとともに、ジやモクという音声という形式も示し、さらに〈耳〉や〈目〉という意味を表わしている。

このことから、漢字自体は非常に効率的な、情報価値の高い文字ということになるが、ことばの運用面から見た場合には、コストがいちじるしく高い。なぜなら、単語の数だけ漢字の種類が必要になるからである。表音文字なら、その言語の音声の種類数分だけあれば、あとはその組み合わせで間に合う。また、種類数が必要な分だけ、漢字は、それを構成する要素がどんどん複雑になる。これらは、文字を習得するうえで大きな障害となるだけでなく、実際に書いたり読んだりする際にも、その漢字を知らなければ、支障が生じるのである。

にもかかわらず、古代中国文明は日本を含めた東アジア全体に強い影響をおよぼし、それにもなつて漢字使用圏も拡大することになった。そのため、中国語以外の言語を用いる近隣の国々では、それぞれの自国言語に無理やりにも合わせる形で、漢字を使用せざるをえなかった。当時の日本もまったく同様であるが、他国とは違って、漢字を漢字として使ういっぽうで、漢字を改変して、日本語独自の文字を作り出すという画期的な工夫を施した。それが「仮名」である。

〔万葉仮名〕

それがいつかは分からないが、日本という島国において、日本語の元となる言語ができあがって以来、漢字という中国語の文字が日本に入ってくるまで、日本語固有の文字は存在しなかった。江戸時代の国学者たちは「神代文字」という固有の文字があったと唱えたが、学問的には否定されている。

漢字が初めて日本に入ったのがいつ頃かとはつきりしていない。近年は次々と発見される遺物などにより、紀元前まで遡るのではないかと推定されるようになった。もとより、漢字だけが勝手にやってくるわけではないから、当然、それを知り、用いる人々、具体的には中国人や韓国人が日本に渡来し、もたらした。当時の日本人（といっても、ごく一部）は、中国語の発音だけでなく、中国語の文章（漢籍）の読み方も、その人々に教わったと考えられる。

その頃の日本人にとって、ことばの形式として文字は、漢字しかなかった。だから、何かを書き記そうとすれば、漢字以外になかった。しかし、漢字は中国語固有の文字であるから、中国語とは言語的な性格がまったく異なる日本語に、それをそのままあてはめることはできない。どうすればよいか、そこが、まさに工夫のしどころであった。

実際には、二つの方法が試みられた。一つは、その日本語と意味に対応する漢字を用いるという方法である。たとえば「こひ」ということばを書くとき、それと意味的に対応する「恋」という漢字を当てるのが、それである。一般に、漢字のほうを中心にすれば、「訓読み」と呼ばれる。もう一つは、その日本語の音声に近い、中国語の発音を表わす漢字を用いるという方法である。たとえば同じく「こひ」ということばを書くのに、「孤」という漢字のコという音と「悲」という漢字のヒという音を組み合わせる表わすのが、それである。その際、「孤」や「悲」という漢字のもつ意味は無視し、その音だけを利用するのが原則である。

この後者の方法が、「仮名」の始まりである。今は「かな」と呼ぶのが普通であるが、元は「かりな」つまり仮りの文字という意味であった。仮りではない本物の文字を「真名（まな）」と言い、漢字のことである。

当初の仮名は、形は元の漢字のままの、いわゆる楷書体であった。そのような仮名を「万葉仮名」と称する。奈良時代にまとめられた万葉集の和歌の表記に代表的に見られることからであり、和歌一首全体が万葉仮名で表記されているものも、その一部だけのものである（図1参照）。この仮名は万葉集よりはるか以前から、和歌のみならず、人名・地名などにも用いられていた。

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代 大泊瀬

天皇御製歌

籠毛與美籠母乳布久思毛與美夫
岳爾菜採須兒家吉閑名告沙根虛
乃國者押奈戸手吾許曾居師告名

【図1】万葉仮名

〔仮名〕

日本語の音声に対応する仮名としての漢字の使用に慣れてくるにしたがつて、より簡便な表記法が模索されるのは自然な成り行きであろう。それは、もっぱら漢字の形に向けて行われた。

現代でも、漢字と仮名を一字単位で比べてみれば、どちらが簡単かは一目瞭然である。漢字は一般に画数が多く、それを楷書で書くとなると、相応の時間がかかるし、字を収めるスペースも必要となる。この問題を解決するために、字の形の変更に關して、二つの方法がとられた。

一つは、形の省略である。漢字一字を構成する、特徴的な一部分だけを残し、後は省略してしまうのである。たとえばイという音を表わす「伊」という漢字の偏である「イ」だけを残し、作りの「尹」は省く。こうすれば、書くのが簡単になるし、スペースも小さくて済む。これが今の「カタカナ」の原形である。

もう一つは、書体の変更である。漢字書体には楷書・行書・草書の三つがあり、順に文字の崩し方がはなはだしくなる。楷書を草書にすれば、その分だけ楽に速く書けるようになる。古くは毛筆しか筆記用具はなかったから、なおさらである。そのうちに、同一の漢字を元にしつつも、漢字として使う場合と仮名として使う場合とを区別するために、仮名のほうの崩しを草書体よりもの

物語を変体仮名で読むために

お一層強めた、「極草」という書き方になった。これが今の「ひらがな」の原形である。

なぜ、このように方法が二つあったかといえは、それぞれの仮名を用いる用途が違ったからである。カタカナのほうは、もっぱら漢籍を読む際、漢文の行と行との狭い隙間にその読み方を示すためのものであった。ひらがなのほうは、日常的な日本語の文章（たとえば和歌や手紙）を書く際、さらさらと文字を続け書きやすいためのものであった。

前者は学者や僧侶を中心とした男性がその主体であるのに対し、後者には女性も含まれたことから、ひらがなは「女文字」とも呼ばれるようになった（ちなみに、「男文字」はカタカナではなく漢字そのもの）。

ひらがなであれカタカナであれ、仮名は漢字を元にしてはいるものの、次の二つの点で、漢字とは決定的に異なっている。一つは、漢字のもつ意味という面を一律に切り捨てたこと、もう一つは、漢字の元の形とは似ても似つかないものにしたこと、である。これらによって、仮名は、仮りの文字であることから脱して、日本語固有の、表音文字としての地位を確立することになった。

2 概説―いろは歌と変体仮名

〔音節〕

仮名は日本語の音声に対応する文字であるが、より厳密に言えば、言語音声の基本単位となる「音節」に対応する。音節とは、母音を中心とした、発音の一まとまりのことで、日本語に即せば、五十音図に掲げられた仮名一つ一つが音節を表わしている。どれも母音を含み、ア行以外はその前に子音が付く形になっている。

現代日本語の音節の種類は一〇〇程度である。ただし、五十音図だけでは半分でしかなく、しかもヤ行やワ行のように一部が欠けている行もあるから、じつは四五種類しか示されていない。他にどんな音節があるかと言えば、濁音で始まる、ガ・ザ・バ行、拗音を含む、キャ・ギヤ・シャ・ジャ・チャ・ヒャ・ピャ・ミャ・リャ行である。さらに、音節相当とみなされる撥音のン、促音のツもある。

平安時代に整えられたひらがなやカタカナは、表音文字でありながら、これらすべての音節には対応していない。その理由は二つある。一つは当時の日本語の音節としては存在しなかった、あるいは認知されていなかったからである。たとえば、拗音や撥音、促音である。これらはおもに中国語の発音からもたらされたもの

物語を変体仮名で読むために

であり、それを表記せざるをえない場合には、直音表記（たとえばシユを「す」と表記する）か無表記（ツは表記しない）か類似表記（ンを「む」と表記する）などの方法をとった。

もう一つは、濁音は当時の日本語にもあったものの、それ専用の仮名は作り出されなかったからである。万葉仮名では清濁の区別がされていたが、ひらがなやカタカナでは清音に対応するのみで、濁音にも区別なく当てられる。いわゆる濁点が用いられるようになるのは中世になってからのことである。なぜ清濁の区別をしなかったのかについては、議論のあるところであるが、もともとの日本語には濁音で始まる語がなかったことから、清音と同等の価値が認められていなかったのかもしれない。

以上とは反対に、現代日本語では用いられなくなった音節もある。ヤ行のイトエ、ワ行のヰとヱ、ヲである。いろは歌が生まれた頃には、まだワ行の、この3音節は生きていたので、それぞれに対応する仮名が存在したが、ヤ行についてはもはやア行のイトエと同じになっていたため、別に仮名を用意する必要がなくなっていた。

仮名が日本語の音節に対応するものならば、歴史的な発音の変化に応じて、そのつど仮名にも変化があつてよいはずであるが、形自体としては平安時代とほとんど変わりが無い。

〔対応〕

現代では、一つの音節に対しては一種類の仮名が対応する。五十音図は、まさにその一対一という関係を示している。このような関係が成り立ったのは、二〇世紀に入ってからのことである。しかも自然にそうなったのではなく、当時の政府の小学校令改正の通達による。それ以降、公けの文章においては、一対一の仮名使用になった。

それ以前はどうだったかというと、一つの音節に対して複数の仮名が対応することが当たり前であった。複数の仮名とは、同じ音節を表わすとしても、その仮名の元になっている漢字（字母という）が異なっている仮名のことである。日本語の、ある音節に対応する音を表わす漢字自体は数多くあるので、その中から仮名としてどれを選ぶかについては、万葉仮名の頃以来、長い期間にわたって、多くの試みがあった。

一般的には、仮名用に使われる漢字としては、なじみがあるもの、相対的に画数が少ないもの、形が他と紛れにくいもの、などの条件が考えられる。しかし、そのすべての条件を満たしているとは言いがたい仮名が、少なからずある。中には現代と同じく、古くからほぼ一対一で対応する仮名もなくはないとはいえ、大方は一つの音節にたいして複数種類の仮名が対応している。

たとえば、ひらがなでは、「あ・え・ら・わ」などは現在と同じ仮名がほぼ一種類であったのに対して、テという音節には「天・帝・低・亭・転」、ヒには「比・飛・日・非・避・火」、モには「毛・裳・母・茂・蒙」など、頻度に差はあるものの、多くの仮名が当てられていた。

また、音節と仮名の対応の前提となるのは、日本語の音節に対して、その仮名の字母となる漢字の中国語音がほぼ同じか、それを含むか、している必要がある。ワに対する「わ」の字母の「和」という漢字の発音は同じであり、モに対する「も」の字母の「毛」の発音モウにはモが含まれている。

このようにほとんどの仮名は、字母の漢字の音読み（借音）と対応するのであるが、中には訓読み（借訓）を利用したものも見られる。

右に挙げた例における「日」や「裳」という元の漢字は、音読みはニチ・ジツやショウであり、ヒやモというのはそれらの訓読みつまり日本語なのである。他にも、ハを表わす仮名として主流だった「者」やメの仮名の「女」も、同様である。

このようにして、日本語の各音節にどの漢字を仮名として対応させ、さらに現代のような一対一という関係になるまでには、さまざまな曲折があったのである。

〔変体仮名〕

「変体仮名」というのは、同一の音節に対する複数の仮名のこと、とくには後に一つに決められた仮名およびその形以外の仮名をさす。ひらがなにもカタカナにも、変体仮名は存在するが、多くはひらがなに見られる。「変体」つまり変わった字体とは、仮名の元になる漢字が違えば、当然その形も違うので、仮名として崩しても異なった字体となる。また、同じ漢字であっても、その崩し方や崩しの度合いによって、やはり見え方が異なる。

現代の仮名は、五十音図に示されるように、それぞれ基本となる形があり、一字単位に切り離されているので、判別しやすい。それでも、実際に筆記された仮名を見ると、今でも紛らわしいものが多い。それは元々、漢字の形を極力簡略化した分だけ、仮名全体として見ても、それぞれを区別するポイントが微妙になっしまったからである。

たとえば、「い」と「ひ」、「う」と「ろ」、「お」と「す」、「か」と「や」、「く」と「し」、「こ」と「て」など、一画ごとの長さや、曲り具合、続け具合などの微妙な違いによって、それぞれを単体でとらえるかぎりでは、どちらにも見えてしまう。

これが、毛筆で続けて書いたものとなると、個々の仮名の識別がよりいっそう厄介になる。まして変体仮名というバラエティも

物語を変体仮名で読むために

あるとなれば、なおさらである。現代人にとっては、古い「写本」をばつと見ただけでは、そもそもそれが文字であるとさえ思えないかもしれない。それほどに、今とは表記のしかたが異なっているのだから、文字として読めるようになるには、それなりのトレーニングが必要となる。

続け書き（連綿体）された表記の場合には、まずは、どこからどこまでが一字の仮名なのかを見極めなければならない（図2参照）。その見極めには、次の二つの点に配慮する必要がある。

一つは、複数の変体仮名の可能性も含めて、その形がどの仮名にあてはまるか、選択の範囲を狭めることである。崩し具合によっては、仮名ではなく漢字そのものとして使っている場合もある。ただし、いわゆる仮名文を対象とするときは、仮名で書かれていることを前提にしたうえで、それがどの仮名の形に相当するかを、変体仮名の一覧などを参照しながら、確認する。

もう一つは、前後の文脈から、どういう単語を表記しているかを推定することである。変体仮名には、ほとんど同じ形のように見えても、まったく別の仮名であることもある。単語は、助詞以外ならば、普通二音節以上から成り立っているのだから、前後の仮名との兼ね合いで、どのような単語ならばありえるかを考え、その中で形として合致する仮名を認定するのである。

〔いろは歌〕

ひらがなが日本語の文字の体系としてほぼ整ったのは、平安時代の中頃、一一世紀あたりと考えられている。

「文字の体系」というのは、当時の日本語の音節すべてに当てるべき仮名が出揃い、それらが使用・認知されるようになったということである。その認知の証とみなされるのが「いろは歌」である。

いろは歌とは、当時の四七種類の音節に対応する仮名を一回ずつ使って、「いろはにほへと ちりぬるを」で始まり、「あさきゆめみし めひもせず」で終わる、七五調の歌である。今、これを読み上げる際には「イロワニオエド チリヌルオ」、「アサキユメミジ エイモセズ」となり、傍線部のように元の音節と仮名が不对応になるが、これはその後発音が変化したことや、仮名に清濁の区別がなかったことなどによる。

いろは歌は、その内容が諸行無常という仏教思想であるところから、真言宗の開祖であり、名書家でもあった空海の作とも伝えられるものの、定かではない（柿本人麻呂のダイニング・メッセージという説もあるが、仮名に対応する音節の種類から、奈良時代では成り立ちえない）。

そもそも、いろは歌の作り方はことば遊びの一種である。同じ

物語を変体仮名で読むために

ことば遊びとして、いろは歌より先行するものに、不完全ではあるが、「たろに」や「あめつち」というのもあった。これらは単に遊ぶために作られたのではなく、それなりの実用的な目的があった。ひらがなの学習用教材である。

ただし、当時であって、誰もがひらがなを学習できたわけではない。貴族の子弟という、きわめて限られた範囲のみであった。そのうえで、男子はさらに漢字を学習してゆくことになるが、女子はひらがなを習得し、それを美しく書くことが嗜みとされた。そこからやがて、いろは歌は、現代の五十音図と同じく、文字習得の初期教材として一般にも定着・普及してゆくことになった。

国語辞典類が五十音順配列になるのは明治時代に入ってからのもので、それ以前は平安時代以降、ずっといろは順であった。つまり、いろは歌は、それを知らなければ辞書も引けないほど、常識化していたということである。

ちなみに、五十音図のほうであるが、じつはこの元になるのは平安時代にすでにあった。仏典の原語であるサンスクリット語の研究書に見られる。カタカナで書かれ、行や段は順番が今とは異なるが、基本の構成は同じである。ただし、こちらは僧侶や学者の間でのみ知られるものであり、近代になるまで一般化することにはなかった。

3 概説―仮名文字と仮名文学

〔ひらがな文〕

すでに述べたように、二種類の仮名のうち、カタカナはもっぱら漢文を訓読するために作られたものであり、漢字を補助する役割を担っていた。そのため、その後も、漢字を主体とした表記の文章に仮名が用いられる場合には、カタカナを用いるのが一般的であった。そのような文章はおもに公的あるいは事務的な文書に多く、それにカタカナを添えることは、じつは二〇世紀半ばの敗戦前まで行われていた。

これに対し、ひらがなのほうは、ひらがなのみ、あるいはひらがなを中心とした表記の文章である。文字としてひらがなしか知らない、またはひらがなしか使えない人ならば、当然のことであろう。それでも、私的な、狭い範囲での、簡単なコミュニケーションのための手段としてならば、十分に用が足りたと考えられる。

ひらがな中心の文章において、漢字が用いられている場合もある。そういう漢字は字形がごく易しく、しかも日常的に目にするものに限られる。カタカナと見られる仮名が含まれる場合もあるが、もともとひらがなとカタカナで字母となる漢字が同一のものがいくつもあり（たとえば「う」と「ウ」、「き」と「キ」、「せ」

と「セ」、「へ」と「ヘ」、「り」と「リ」など）、実際に書かれた形ではほとんど見分けが付けがたい。おそらく当時の人にとって、両者を混同しているという意識はなかったと思われる。

また、現代の文章には句読点が用いられるのが普通である。さらに引用にはカギカッコを付けたり、疑問符や感嘆符を添えたりすることもある。そのようにして、ことばの切れ続きを示したり、文の性質の区別をしたり、書き手の気持を強調したりする。

ところが、平安時代のひらがな主体の文章には、これらの補助的な符号がまったく用いられていない。となると、読解の手掛かりとなる、ことばの切れ続きが、見た目では、判断できないことになる。今ならば、「わがち書き」といって、英語のように、単語あるいは文節ごとにスペースを空ける書き方があり、それに従えば、ひらがなだけで書いてあっても、ことばの切れ続きが分かる。しかし、そういうスペースもなく、加えて、ひらがなだけが続けて書かれているのであるから、現代の文章とは事情がまったく異なる。

そういうひらがなだけの文章を、当時の人々がすらすらと読むことができたのか、という疑問を抱くのは当然であろう。しかし、そういう書き方しかなかったとするならば、否応なくそれに取り組むしかなかったのである。

〔文章表記〕

「文章」といえば、一般的には、複数の文が連続して、一まとまりになったものである。ただし、文字で書かれたことばの単位の一つとして考えた場合、いわゆる散文（普通にいう文章）だけでなく、短い一文のみから成る詩歌のようなものも、文章に相当する。

この意味における、日本語によって表現された、もともと古い文章は、和歌である。和歌の典型は短歌であり、五・七・五・七・七の五句三二音から成る。最古の歌集である万葉集に収められた短歌には、万葉仮名以外の漢字で表記されたものもあるが、まずはこの音数律に基づいて、ある程度読み方が推定される。

ひらがなだけで書かれた和歌も、同様である。音数律だけでなく、和歌特有の用語（歌語）や言い回しもあるので、そういう手掛かりから読みの見当が付けやすい。私的なコミュニケーションとして、平安時代には和歌のやりとりが頻繁に行われ、和歌はひらがなで書かれたわけであるが、和歌であるかぎり、それをどう読むか分からず途方に暮れるというのは考えにくい。そういう事態があるとすれば、「手」つまり書き方自体が下手だったたり癖があったりした場合である。

一方、普通の文章として、日本人が最初に書いたのは、漢文す

物語を変体仮名で読むために

なわち中国語の文章であった。これは単に漢字のみを使って表記したということだけではなく、語彙や文法も含めて、中国語のそれに従った文章ということである。このような漢文あるいはそれに準じた文章は、その後も日本人によってずっと書き続けられた。言うまでもなく、そこにひらがなが登場する余地はない。

日本人が日本語によって書いた最初の独立した文章は、平安時代の「土佐日記」である。その有名な冒頭文「男もする日記といふものを女もしてみむとてするなり」が意味しているのは、次の二点である。一つは、漢文ではなく日本語（和文）で書くこと、もう一つは、漢字ではなくひらがなで書くこと、である。日本語で書くというのは、日本語の話し言葉で書くということであり、それはひらがなでしか正確には書き表せないものであった。つまり、日本語とひらがな表記はセットだったのである。

しかし、ふだん話すことをそのままの形で書くことはできない。そのため、紀貫之は漢文日記のスタイルを借りることにした。その上で、月日などを表わす漢字を多めに用いて、改行し、日ごとの文章の切れ目を分かりやすくするとともに、一日分の記事もほとんどは短かめに、短い文の連続によって構成した。これらの工夫によって、ひらがなを主体とした表記ながらも、まがりなりにも読める、日本語による文章を作り上げることができたのである。

〔仮名文学〕

ある文章が文学であるか否かは、文章それ自体では評価できないことである。「土佐日記」も単なる旅日記ではなく、日記文学と呼ばれるが、それは日本語とひらがなで書かれたからというだけではなく、受け手がその文章をどのように読んだかによる。

「仮名文学」という名称はおもに、平安時代の、女性が、ひらがなで書いた作品をいう。紫式部の「源氏物語」、清少納言の「枕草子」がその代表である。それらの文学がとくに「仮名」によってくられるのは、単にひらがなを主体として表記されているからではなく、ひらがなが当時の作品の、日本文学としての一つの文学的達成を可能にしたとみなされるからである。その後も、ひらがなの作品は書かれたが、当時の文章を模したという意味での、マニアックな「擬古文」か、あるいは庶民向けの娯楽読み物にすぎないものだった。

ひらがなが文学的達成を可能にした理由は、三つ考えられる。第一は、日本語によって文章を書くことを可能にしたこと、第二は、女性が文章を書くことを可能にしたこと、第三は、内面を描くことを可能にしたこと、である。これらの前提にあるのは、それ以前の文章には漢文しかなかったということであり、漢文では書きえないことばなり内容なりがあったということである。

第一と第二は、「土佐日記」に関して述べたとおりであるが、第二点については、女性への仮託という形しかとれなかったのが、文字どおりの女性によって実現したということである。それ以前は、男性とは異なり、女性が自らの文章を公けにする機会ほとんどなかった。第三点は、女性ならではの内面観照が多彩かつ精細な日本語の語彙や言い回しを駆使することで表現されたということである。この点がまさに文学たらしめることにもなった。

このような仮名文学はそれなりの長さを有し、ほとんどがひらがな、しかも変体仮名も交えた連綿体で書かれているのであるから、和歌の場合とは事情が大きく異なる。いろは歌などを通して、ひらがなの読み書きを一通り習得し、多少の漢字は知っていたとしても、その程度で初読から難なく読めたとは考えにくい。

おそらくは、前提としての読み聞かせがあったことが想定される。読み慣れた人に読んでもらったのを繰り返すことにより、文章の流れのおおよそが記憶されたものではあるまいか。そのうえで、読む物もきわめて少ない時代であったから、同じ文章を何度読み返しているうちに読めるようになったと考えられる。

それでも、もともと読みにくい写本があったのも事実であり、そのため藤原定家のような人が後々のことを考えて、読みやすく正しい本文に書きなおすということが行われた。

〔書美〕

表音文字は、相互に形として明確に区別され、それぞれ異なる音声を表わすことができれば、文字という形式としての機能をはたすことになる。これを示差的機能という。しかし、この区別が曖昧であったり、同じ音声を複数の文字が表わしたりすれば、言語的機能としては不十分だったり余剰だったりする。それは、文章を読み書きするうえで不都合なことである。変体仮名というのは、まさにそういう問題を抱えていた。

言語的機能だけを考えれば、一つの音節には一つの仮名を当てるのが最適であるから、二つ以上の仮名があり、かつそれらが一つの文章内で用いられているとすれば、それは音節以外の何かを示す機能を分担していると、一応みなされる。たとえば、現代でならば、同じ音節を書くのに、ひらがなとカタカナでは、それぞれ何か違いがあると考えるところと同じである。実際に、これまでの変体仮名の研究によって、表記される対象が、語頭か否か、助詞あるいは助動詞か否かなどによって、変体仮名の使い分けが見られるという指摘がある。しかし、その指摘はごく一部の仮名についてであって、変体仮名全体に及ぶ一貫したものではない。

言語的機能以外から指摘されるのは、書美つまり毛筆の書としての見栄えという美的な観点である。「変字法」とか「避板法」

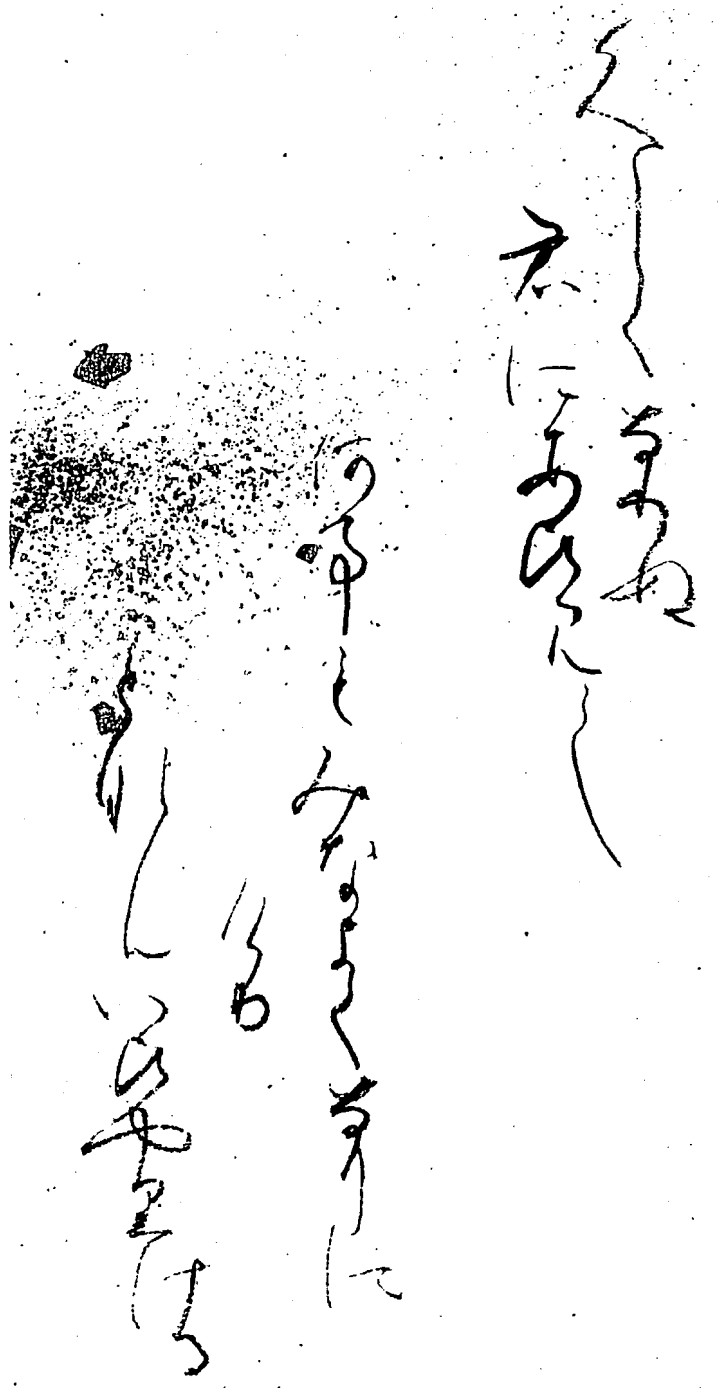
物語を変体仮名で読むために

とかいわれ、単調さを避け、紙面に変化を付けるために、同一紙面の近くに同じ仮名が出てくる場合には、別の変体仮名を用いるというものである。

このような配慮がさらに推し進められたところに、和歌の「散らし書き」がある。紙全体に仮名を散らしたように書いたもので、句の切れ目や単語の切れ目よりも、書作品としての見栄えを重視した切れ続きにされる。さらにそれとともに、あえて一般的ではない、難しい変体仮名も多用されるようになった。

仮名の体系が整うまでのプロセスにおいて、さまざまな変体仮名の使用が試みられ、それがやがておのずと淘汰されて体系化へ向かうのは言語の運用という点からは必然的なことである。ところが、いったん体系化されると、今度は書という美的な観点から、あえて言語的機能を損なうような多様化を見せるのである。このことも含めて、平安時代における仮名には、大きな混乱と流動があったことが知られる。それがまた当時の文章を読む難しさにも結び付いている。

仮名の歴史を大局的に見るならば、次第に言語的機能を優先した、より整備された体系の方向に向かうことになった。一方、仮名の美的機能を優先する方向は、現代では仮名書という書道の一ジャンルにおいて、かろうじて生き延びているのみである。



【図3】現代の仮名書（宮川保子筆『伊勢物語』）

4 概説―平安時代の物語史

「物語の出で来はじめの祖」【竹取物語】

仮名文字の普及が自在な和文の表現を可能にしたことで、生まれたのが物語である。平安時代におびただしい数の物語が作られ、読まれていたことは、『三宝絵詞』（源為憲）「大荒木の森の草よりも繁く、有磯海の真砂よりも多く」や『枕草子』（清少納言）「物語は」章段などから想像できる。その多くは散逸してしまい、現在読むことはできないが、淘汰されず残った物語はすべて、成立時のみならず、世代を経てなお多くの読者を持ち、後世に読み継がれていった作品である。

【源氏物語】総合巻において「物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁」と呼ばれた『竹取物語』は、現存する物語の中で最古のものであるが、この評は「最初に成立した物語」というような成立時期のみをいうのではなく、「初期物語の傑作」「王朝物語の始発」という賞賛も込めた言葉にはならない。

竹から生まれ、翁と姫に愛育されたかぐや姫の受難は「この世の人は、男は女にあふことをす。女は男にあふことをす。その後なむ門広くもなり侍る。」「変化の人といふとも女の身持ちたまへり」と、地上の男と結婚するよう迫られることにはじまる。「変

物語を変体仮名で読むために

化の人」であっても「女の身」を持つ以上、「結婚」し一族を繁栄させねばならない、という地上の論理に、かぐや姫は悩み、対抗する。五人の貴公子たちのみならず、帝に求婚されても最後まで結婚拒否を貫き、昇天するかぐや姫の物語は、難題婿・天人女房・貴種流離譚など様々な伝承説話を枠組としながら、地上と天上、人間と天人の隔たりや、人間世界の悲しさ「もの思ひ」や「あはれ」を語る。文体に多少きこちなさは残るものの、登場人物の内面が「仮名」散文の特性を活かして描かれているといえよう。そしてそのテーマや表現は、後世の物語に大きな影響を与えた。

【業平らしき「昔男」の一代記―「伊勢物語」】

かぐや姫の誕生から昇天（死）までが『竹取物語』の軸として描かれているように、初期の物語は多く主人公の一代記として描かれる。【伊勢物語】も同様で、在原業平（八二五―八八〇）らしき「昔男」の元服から臨終までを、和歌を核として一二五の短編によって語った作品である。「昔、男ありけり」と主人公を随化して語るものの、『古今集』に収載される業平作の和歌三十首がすべて【伊勢物語】にあることや、『源氏物語』総合巻の記述「業平の名をやくたすべき」「在五中将の名をば、えくたさじ」などから、【伊勢物語】の「昔男」が在原業平として読まれてきたこ

とは明らかである。

そもそも、在原業平は、平城天皇皇子阿保親王と桓武天皇皇女伊都内親王の子であり、一歳の時在原姓を賜り臣籍降下した皇統の血をひく人物であった。右近中将に至り、右馬頭や藏人頭を兼ね、五六歳で没するが、血筋の高さに応じた官職についたとはいえない。その要因は当時の政治状況にある。業平の祖父平城天皇は古都奈良を愛し、歴史を逆行して薬子の変に巻き込まれ、皇太子高丘親王は廃されて海外に流浪し客死した。業平の時代には、藤原良房と基経が摂関政治を推進し、他氏を排除する。名門紀名虎の娘静子の生んだ第一皇子惟喬親王は、藤原良房の娘明子の生んだ第四皇子惟仁親王（後の清和天皇）に圧倒されて皇太子になれなかった。業平は、両親ともに皇族でありながら、生まれる前も、生まれてからも敗者の側にいた。

『伊勢物語』には、「都」から「鄙」、「子ども」から「老女」まで、様々な愛の形が描かれるが、権力とは別次元の場で生きようとする「昔男」と高子（二条后・清和天皇妃）、文徳天皇皇女恬子内親王（斎宮）といった禁忌の恋に、業平の姿が重ねられる。初段の「女はらから」は男と同腹の妹（姉）とも読むこともできる。二段は人妻と、三段・六段は入内前の高子（二条后）への恋を描いており、『伊勢物語』のはじまりが、禁じられた相手への

男の想いをテーマとしていることは重要である。

また、惟喬親王との主従関係、有常との友情など、日常的な枠組みから離れ、「みやび」と「なさけ」の精神が貫かれるのが『伊勢物語』の特質といえよう。それらの出来事を経て、一二五段に辞世の和歌が置かれるわけであるが、その直前の一二四段の「思ふこと言はでぞただにやみぬべき我と等しき人しなければ」からは、言葉（和歌）の限界（敗北）を感じながらも、それでも和歌を詠みあげる「昔男」の悲痛な心が読みとれる。

歌物語には他に、『平中物語』や『大和物語』がある。『平中物語』は、歌人平貞文（一〇九三）とおぼしき「男」の女性遍歴にまつわるエピソードを語る。『伊勢物語』と通じる点もあるが、『平中物語』の「男」が、現実社会に縛られることを嘆きつつもどうすることもできず、日常にたゆたいながら生きざるをえないところに特徴を持つのは、『伊勢物語』との大きな違いであろう。「男」の恋はほとんど破綻して終わり、相手も身分の低い女房が中心で、後には滑稽譚の代名詞にまでなった。『大和物語』は、宇多上皇周辺の歌語りを母胎として、複数の女房たちによって成ったともいわれている。『古今集』時代の人物の歌にまつわる小話も多い。全体を統一する主人公はおらず、一話一話は独立しつつも、群としてのまとまりを持つ。個々の章段は『伊勢物語』と比べて非常

に長く、和歌の果たす役割が軽くなっている。歌物語、というジャンルに数え上げられてはいるが、散文によって物語ろうとする傾向が強く、行間や空白を読ませる『伊勢物語』の地の文と対照的な物語といえる。

〔光源氏誕生―『源氏物語』〕

当時、権勢を掌握した藤原氏に欠けているものが一つあった。それが血統である。皇統という高貴な血筋は物語の主人公に相応しい特性であり、そこに『伊勢物語』が生まれた原動力もある。現存最古の長編物語『宇津保物語』の主人公仲忠も、継子いじめ譚を軸に描かれるシンデレラストーリー『落窪物語』の女主人公落窪の女君も王統腹（わかんどおり）であった。『源氏物語』の主人公光源氏も同様であるが、特に「一世源氏」という、臣籍降下した天皇の皇子を物語の主人公に据えた点において異彩を放つ。比類ない美しさに「光る君」と呼ばれるが、それは「もと光る竹」から生まれた子が、「かぐや姫」と名付けられたこととも通じる。

類まれなる美貌と資質を持ちながらも臣下として生きる光源氏の青年期は、『伊勢物語』の「昔男（業平）」像を引き継ぎ描かれた。父帝后藤壺を永遠の理想、恋慕の対象としつつ（禁忌の恋）、

物語を変体仮名で説むために

多岐にわたる女性と交渉を持つ姿は「色好み（古代の王者の理想の結婚生活の倫理）」ともいわれるが、物語の主人公としてこれを置き換えれば、「まめ」な心をもつて様々な女性と関係を持ち、和歌を中心とした芸能に秀で、女性をひきつけてやまない力を有していることを表わす。時には破滅的な恋に身を置き、朱雀帝が寵愛する臘月夜尚侍との関係露見を契機として、光源氏が都を離れ須磨・明石を流離するところは、「昔男」が、高子（二条后）との恋ゆえに藤原氏にうとまれ東下りしたことに重なる。

都に帰還した光源氏は、もはや業平ではなかった。その後ひたすら栄華の道を歩む。藤壺との不義の子冷泉帝は帝位につき、その後見である光源氏は、「准太政天皇」という地位にのぼりつめる。子供にはあまりめぐまれなかったが、関係した女性の娘たちを養女にすることで、後宮での勢力も確かなものにしてゆく。光源氏の恋物語は、光源氏の政治家としての一面も浮かび上がらせる。

藤壺ゆかりの女君紫の上を六条院の春の町にすえ、最愛の人とし、光源氏の晩年は愛情関係においても、権力関係においても順風満帆に見えた。しかし、藤壺血縁の女三の宮降嫁により、妻妾関係のバランスは崩れてゆく。紫の上の病と、女三の宮と柏木の不義密通、不義の子薫誕生、と光源氏は因果応報を痛感しつつ苦悩する。無上の栄華を手に入れたようにみえたが、紫の上に先立

たれ、孤独と追慕の中で出家を決意し、光源氏は物語から姿を消す。その経過を、幻巻は四季と和歌によって語ってゆく。

物語は無情なほどの筆致で、光源氏と紫の上のすれ違いを描き、人の心が通い合わない現実をつきつける。

『宇治十帖』そして『狭衣物語』へ

光源氏の物語は終わったが、『源氏物語』は終わらなかった。特に、光源氏の子孫である薫、匂宮と、宇治の女君との恋を描いた十帖は『宇治十帖』と呼ばれる。男主人公の属性は「光」から「匂」「薫」へと二分され、舞台は都から宇治へと移る。女君も、藤壺のような高貴な女性ではなく、皇統の血をひいてはいるものの、不遇の、もしくは身分的には一段劣る鄙の女君に焦点があてられる。

不義の子薫は、幼い頃から出生に疑問を抱き、仏道に専心する男君として登場する。法の師と仰ぐ八の宮の姫君を垣間見てから、仏道と恋の間で惑い続けることになる。最愛の人大君は、頑なに結婚拒否をつらぬいたまま命を落とす。残された薫は妹中の君にひかれてゆくが、すでに彼女は匂宮の妻であった。心の隙間を埋めるため、大君の異母妹浮舟を大君の形代として宇治に送るが、召人の娘で受領の継娘となった浮舟に対する扱いは、大君と同様

に処することはできなかった。世間体を気にするあまり訪問は間遠で、結果として匂宮との密通を許してしまう。薫と匂宮の求愛に悩んだ浮舟は、入水を決意するも死にきれず出家したが、心の悩みが晴れることはなかった。浮舟の生存を知った薫は、手紙を送るが浮舟は受け取ろうとしない。自身が浮舟を宇治に隠し据えたように、別の男が横川にかこつているのではとの疑念を抱く薫の姿を描いて物語は幕を閉じる。

このような恋と仏道の間で揺れる男君に、当事の人々は共感したようである。末法思想が広まる中、仏道に救いを求めようとする多くの人々にとって、薫は新しい男主人公像として受け入れられた。

平安後期に成立した『狭衣物語』の男主人公狭衣は、「光る」という賛美表現、神仏の再来とまで言われる超人的属性は光源氏をなぞらえるが、性質としては薫と近似する。常に憂愁に沈み、思い悩む。兄妹のように育った源氏の宮への片恋に身を焦がし、恋情を訴えるが想いが成就することはない。更に、関係した女君誰一人とうまくはゆかない。飛鳥井女君は流離の上命を落とし、女二の宮は狭衣の子を出産後、彼を許さなまま出家した。一品宮を正妻とするが、夫婦仲はひえきっていた。源氏の宮は神に仕える斎院となる。悲恋に苦しみ、出家を願いつつも、狭衣は神託

により帝位につく。

この物語以降も、恋と出家が連動してゆく作品が生まれ続ける。これまで、悲恋の末出家するのは女君であったが、中世になると逆転して描かれる。

〈参考文献〉

『新版竹取物語』室伏信助訳注（角川ソフィア文庫）全一卷

『新版伊勢物語』石田穰二訳注（角川ソフィア文庫）全二巻

『源氏物語の鑑賞と基礎知識』（至文堂）シリーズもの

『週刊絵巻で楽しむ源氏物語』秋山虔監修（週刊朝日百科）シリーズもの

『竹取物語』『伊勢物語』『源氏物語』『狭衣物語』は、いずれも新潮古典集成（新潮社）、新編日本古典文学全集（小学館）に所収されている。

『日本女性古典文学史「古典編」』後藤祥子 今関敏子 宮川葉子

平館英子編（ミネルヴァ書房）

『岩波講座 日本文学史』久保田淳、栗坪良樹、野山嘉正、日野

龍夫、藤井貞和編（岩波書店）は、文学史を楽しめる論文集。

第2巻、第3巻に平安文学史。全十七巻。

物語を変体仮名で読むために

5 概説―平安時代の本

〔絵と詞、音読と黙読〕

『源氏物語』東屋巻に、次のような場面がある。

絵など取り出でさせて、右近に詞ことば読ませて見たまふに、（浮舟は）向かひてもの恥ぢもえしあへたまはず、心に入れて見たまへる灯影、さらにこと見ゆるところなく、こまかにをかしげなり。

二条院の中の君のもとに身を寄せる浮舟が、絵に見入っている。右近と言う女房に「詞」の部分を読ませ、それを聞きながら「絵」で見ている様に、平安時代の物語享受の様がうかがえる。もちろん、今と同様に、黙読という読み方もあった。

はしるはしる、わづかに見つつ、心もえず心もなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちにうち臥して、ひき出でつつ見る心地、後のくらゐも何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、これを見るよりほかの事なければ、……

『更級日記』の作者菅原孝標女は『源氏物語』全巻を手に入れ、朝も夜も一人几帳の中にこもって、暗誦できるほど読書にふけっている。当事、本はほとんど写本で、人々にとって貴重品だったた

め、「後のくらゐ」よりも源氏物語全巻を読むことの方に価値を見出している姿は、必ずしも大げさとはいえないだろう。

男性は、基礎的教養として四書五経を学び、女性は日々の「つれづれ」の慰めとして物語を読みふけた。物語は、女性の娯楽としてはもちろん、姫君が女性の生き方を学ぶ媒体でもあった。光源氏は、明石の姫君のために、継子いじめの物語を除外するなど、悪影響を与えそうな物語を排除している。

〔本の種類と広まり方〕

本には冊子本と卷子本がある。冊子本は、紙を糊や糸で綴じたものの総称で、一枚ずつページをめくり読む。大きさや綴じ方に様々な種類がある。読みたい部分がすぐ読めるので、漢籍や歌集、物語の多くは冊子の形で作られた。卷子本は、紙を横に長くついでゆき、最後に軸をつけて、巻き取れる形にしたものをいう。大画面で見ることができたため、当時、絵巻物も多く作られた。

平安時代の文学作品の広まり方については、例えば、『枕草子』跋文「左中将まだ伊勢守と聞こえし時、里におはしたりしに、端の方なりし畳をさし出でしものは、この草子載りて出でにけり。まどひ取り入れしかど、やがて持ておはして、いと久しくありてぞ返りたりし。それよりありきそめたるなめり」とぞ本に」や、『紫

式部日記」一局に、物語の本どもとりによりて隠しおきたるを、御前にあるほどに、やをらおはしまいて、あさらせたまひて、みな内侍の督の殿にたてまつりたまいてけり。よろしう書きかへたりしは、みなひき失ひて、心もとなき名をぞとりはべりけむかし」の記事にあるように、作者の意図とは別に本が流布してしまうこともあったようである。『枕草子』の場合でも、伊勢守が持つて返ってしまった『枕草子』と「それよりありきそめたるなめり」とあった本と、「と本に」というこの本と少なくとも三種類の本があることになるのだが、この注記が本当かは別として、古典文学作品は、執筆時点から異本を持つことが少なくないのである。

現在、活字となったテキストは、例えば、「本文は、近世流布本の源流となったとされる古活字十行甲本を底本として作成した。同時代の古写本と比較しても、本文上の欠陥がきわめて少ないと判断されるが、改訂した箇所は、語法上のあやまりのほか研究史を踏まえて私解を記した」(室伏信助『竹取物語』角川ソフィア文庫・凡例)のように、どの本を用いているかどのような方針で校訂したかほぼ必ず記してある。

次のページからはじまる変体仮名の学習は、主に共立女子大学図書館蔵『竹取物語絵巻』と『伊勢物語』を使用している。変体仮名を学習することを通して、物語を変体仮名で読む力をつけ、

物語を変体仮名で読むために

古典文学作品の「本文」が一つでないこと、それぞれの本に個性があることを実感してほしい。

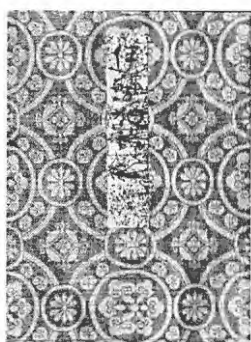
・底本…書写や刊行、あるいは校合、注釈などで拠り所にした本。
・写本…手書きの本、肉筆の本。

・版本…木の一枚の片面に二丁(二頁)分を彫って、墨をつけ、上から紙を当てて、馬れんで擦って印刷したもの。整版で彫った板を「版本」(板木)という。

・翻字(翻刻)…現在通行の文字に変換して書くこと。

本学図書館蔵『伊勢物語』冊子本

本学図書館蔵『竹取物語』卷子本



【翻字】今はむかし竹とりのおきなといふものありけり／野山にましりて竹をとりつ、よろつの／ことにつかひけり名をはさるきのみやつこ／となんいひけるその竹の中よりもとひかる竹／なん一すちありけりあやしかりてよりてみ

【語注】今はむかし…物語に用いられる語り出しの常套的表現。さるき…古本・古活字本「さるき」、群書類従本「さぬき」、天理大学付属天理図書館蔵本「さかき」とする。「か」と「る」は字体類似ゆえの誤写か。さらに「る」と「ぬ」の音を考えると、『新撰姓氏録』右京皇別下に「景行天皇の後裔」と見える讃岐氏の一族で、大和国広瀬郡散吉郷（現在の奈良県北葛飾郡河合町。散吉神社がある）に本籍地を持つ人としての命名か。みやつこ…古代の姓のひとつ。部民を統べる伴造の称。ここでは、のちに「造麻呂」とも呼ばれる翁の名。なん…係助詞。前の語句を取り立てて強調するが、訳出できない場合も多い。「なむ」のあとにくる動詞・助動詞は原則、係り結びの法則によって連体形となる。

【解説】共立女子大学図書館蔵「竹取物語絵巻」全二巻、上巻（縦三三・八cm×全長一六四六・〇cm）、下巻（縦三三・八cm×全長一六四四・五cm）。

【竹取物語】の成立は平安時代初頭のこととみられ、この物語に取材した絵巻も、十一世紀初頭には既に存在していたようである。『源氏物語』第十七帖「絵合」には、「物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁」との表現で「竹取物語絵巻」への言及がなされている。

平安時代に遡る作例は現存しないものの、中世末期から近世にかけて、『竹取物語』に基づく絵巻や絵本が数多く制作され、現存作例も多い。本作も、料紙装飾、書風、絵画様式上の特徴から、その成立は近世初頭の十七世紀のことと推定できる。同時期の絵巻作例として、アイルランドのチェスタービーティライブラリー本、立教大学図書館本、國學院大學図書館本、国会図書館本、九曜文庫本などがあり、近世初頭に「竹取物語絵巻」制作が流行している様子をうかがい知ることができる。諸本の中で、制作時期が他に比して早いとみられるのがチェスタービーティライブラリー本で、詞書や画面内容に他と異なる点が多い。共立本も含む他の諸本は共通点が多く、近世初頭に成立した古活字本や正保整版本などを参照しつつ、絵巻固有の本文が生成し書写されていた可能性がうかがわれる。

物語を変体仮名で読むために

②前のページで読んだ竹取物語の冒頭部分です。「字典かな」を用いながら、変体仮名の右側に字母を書いてみましょう。

今きこゆはるのちのけしき
みづもろもろのけしき
いふはるのけしき
とせんはるのけしき
えんはるのけしき

③次は仮名の右側に翻字を試みしよう。

今さじやうのちやうどいふやうな
めづるやうなやうなやうな
いふやうなやうなやうな
とやうなやうなやうな
えんじやうなやうな

物語を変体仮名で読むために

【翻字】るにつゝ、の中ひかりたりそれを見れば三／すんはかりなる人うつくしうてゐたりおきな云／やうわれあさこと夕ことにみる竹の中にお／はするにてしりぬ子になり給ふへき人なめり／とて手にうち入れて家へもちてきぬめの女

【語注】三すん…一寸は約三センチメートル。「三」は神聖数と言われ、この物語では「三月」「三日」など、しばしば使われる。うつくしうて…シク活用の形容詞「うつくし」＋助動詞「て」で、「うつくしうて」のウ音便化。「かわいらしい姿で」の意。云やう…が言うことには。あさこと夕こと…対句的語法。漢文の訓読語法の影響と思われる。子…「子」と竹で作る「籠」の掛詞。洒落。しりぬ…「知る」＋完了の助動詞「ぬ」。分かつてしまった。見つけてしまった、の意。かぐや姫を見つけて得意げに喜ぶ翁の心情を表している。なめり…断定の助動詞「なり」の連体形＋推量の助動詞「めり」の撥音便。「なんめり」と発音する。

【解説】本文は、上巻第一段詞書で、24ページの続きである。かぐや姫は三寸という小ささで、光を放ちながら竹の中に現れた。この登場には、どのような意味があるのだろうか。まず、三寸という小ささに注目したい。これはいわゆる異常出生譚の一つ「小ざ子譚」の話型を踏むもので、『古事記』『日本書紀』に見られるスクナヒコナなどの話と通じている。本来かぐや姫も神の子としての資質を持っていたということであり、昔話の一寸法師にもその流れは受け継がれている。竹から生まれるというモチーフについて、折口信夫は、「うつば」とは魂の充ちている状態の空っぽの容器であり、空洞のなかには神聖なもの（神霊や魂）が入るのだという。かぐや姫も空っぽの竹の筒の中に「充ちた」存在で現れたのであり、「光」とともに、その誕生の仕方において神聖なものであることが示されているのである。このような「うつば」は物語の型（話型）であり、『宇津保物語』には、将来秘琴伝授することになる聖なる母子が空洞の木（うつば木）の中で暮らす様子が描かれているし、昔話「桃太郎」も、この話型の踏襲と見てよいであろう。実は先述のスクナヒコナにも、天のカガミ船（ガガイモの実のサヤ。15センチくらい）という器（乗り物）が与えられていたのであった。さらに「光」とは、古代神話において神がまとうものであり、神々しい美質を比喻する。かぐや姫の登場場面は、いくつかの話型を用いながら、姫が神聖な、神的存在であることを示しているのである。

物語を変体仮名で読むために

②前ページと同じ本文です。「字典かな」を用いて、仮名の右側に字母を書いてみましょう。

あ　　い　　う　　え　　お
か　　き　　く　　け　　こ
さ　　し　　す　　せ　　そ
た　　ち　　つ　　て　　と
な　　に　　ぬ　　ね　　の
は　　ひ　　ふ　　へ　　ほ
ま　　み　　む　　め　　も
や　　ゆ　　よ

③次は、仮名の右側に翻字をしてみました。

あつちのちやうどおんなのこ
えつちのちやうどおんなのこ
うつちのちやうどおんなのこ
むつちのちやうどおんなのこ
ふつちのちやうどおんなのこ

物語を変体仮名で読むために

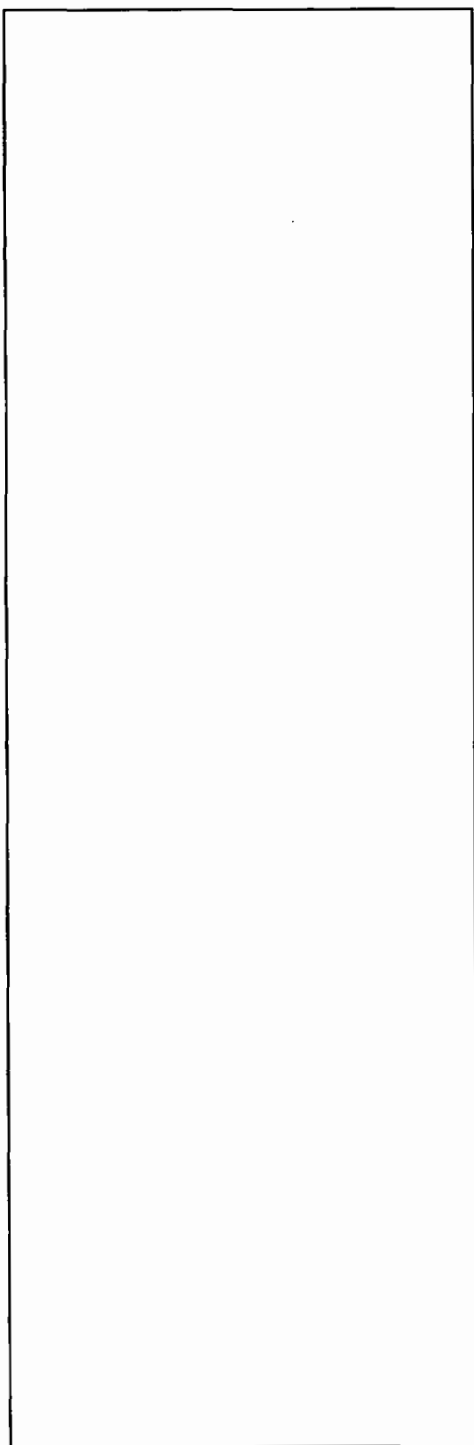
8 物語の絵画化 ―テキストとイメージの相関関係― 「竹取物語絵巻」上巻第一段詞書・絵

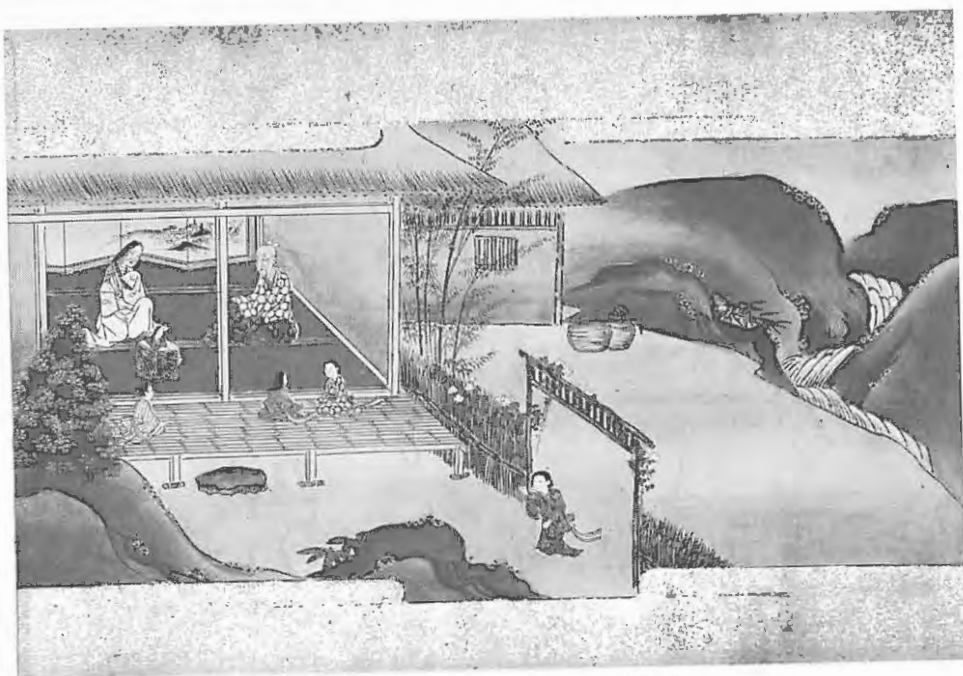
ここでは、絵巻の画面を通じて、物語がどのように解釈され絵画化されているのかということを考えてみましょう。

絵巻の画面は、必ずしも詞書の逐語的な絵画化というわけではありません。詞書には記されているのに絵には描かれていないモチーフや、逆に画面にのみ表された要素もあります。つまり、詞書と絵は相互補完的に一つの物語を表現しているのです。

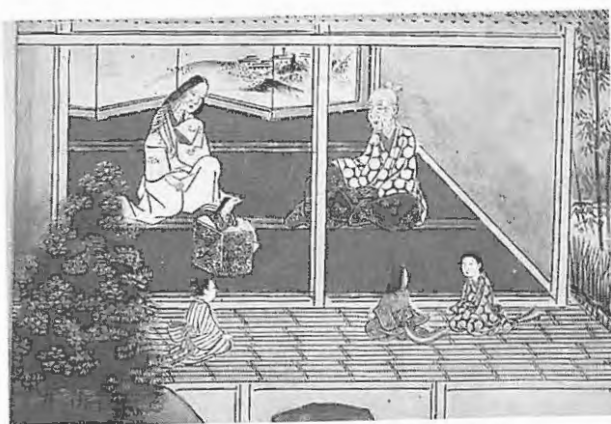
そのような観点から、詞書と画面内容を対照しながら読み込んでみましょう。そうすると、物語世界への理解が深まるだけでなく、テキストからイメージへと展開する、絵巻制作の創造性が浮かび上がってくるはずです。

絵の分析（全図と部分図を参照しながらテキストとイメージの相関関係について考察しましょう）





「竹取物語絵巻」上巻第一段・絵（全図）



「竹取物語絵巻」上巻第一段・絵（部分図）

手にうち入て家へもちてきぬめの女
にあつてやしなはすうつくしきかきりなし
いとおきなければこに入てやしなふ竹とり
のおきな竹とるにこの子を見つけてのち
に竹取にふしをへたて、よことにこかねある
竹をみつくる事かさなりぬかくておきなやう
やうかくゆたかになりゆく此ちこやしなふほ
とにすく〜とおほきになりまさる

【現代語訳】昔、男が、元服をして奈良の京の春日の里に、領地があつて、狩をしに出かけた。その里に、たいそうたおやかで美しい姉妹が住んでいた。この男が（その姉妹を）物のすきまから覗き見してしまった。意外なほど、さびれた旧都にひどくふにaina様子でいたので惑乱してしまった。男が着ていた狩衣の裾をちぎって、その裾に和歌を書いて送った。その男は、信夫摺の狩衣を着ていたのだった。

春日野の若い紫草のように美しいあなたたちを垣間見て、私は紫の信夫摺の模様のようにかざりもなく心が乱れています。とすぐに言いやったのだった。ことのなりゆきが風流だとも思つたのだろう。（この男の和歌は、）

陸奥のしのぶもじずりの模様のように心が乱れる私ではないのに、このように思い乱れるのはあなたのせいですよ。という古歌の趣である。昔の人はこのように激しい愛を訴える恋歌を送つたのだった。

【語注】初冠す：元服して初めて冠をつけること。元服は男子の成人式。年齢は大体十代で、貴人ほど早かった。光源氏は十二歳で元服し、その際に葵の上と結婚した。「初冠」を叙爵とする説もある。春日：現在の奈良県奈良市春日山の西麓、奈良公園のあたり。しる：「治る」であれば領有する「知る」であればかわりがある。なまめく：たおやかな女の美しさをいう。この語が形容詞化した「なまめかし」も、若々しくみずみずしくて魅力的な様子や自然のままで人を加えない美しさをいうのが原義。女はらから：姉妹。男と同腹の姉妹と解する説もある。垣間見：物のすきまからこっそり覗き見すること。郊外や荒れ果てた邸宅に美女を発見するというパターンは、多く恋物語の手法として用いられている。【源氏物語】において、光源氏が北山で紫の上を発見したのも、薫が宇治で大君と中の君の姿を見たのも垣間見であり、この初段を下敷きとする。ふる里：古る里。昔住んでいたところ。さびれた旧都（平城京）。はしたなし：中途半端で落ち着かない、身の置き所がない。信夫摺：摺り衣の一種で、信夫草を布に摺って乱れ模様にしたもの。陸奥国信夫郡（福島県福島市）から産出したものという。狩衣：平安時代の貴族の平服。上着のそでは括りがあり、うしろだけすこし縫い付けである。鷹狩の際や忍び歩きの折に着ることが多い。若紫：紫草のこと。根を紫に染める染料に使用する。「紫のひとととゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る（紫草の一本があるために、あの荒涼とした武蔵野の草もみんないしく思われる）」（『古今集』

八六七・雑上)以後、「若紫」「紫のゆかり」「草のゆかり」と詠まれてゆく。ここでは若い女性の比喩として用いている。「信夫摺り」の原料として使う紫草をかけ、「信夫摺り」の乱れた文様から「心の乱れ」をかける。ちぎった信夫摺りの狩衣の裾に重ねた和歌を詠んでいる。おいづく：「追いつく」とれば、「すぐ」となり、「老いつく」とれば、老人になる、老成する。ついでおもしろき：以下、最後まで語り手の評語。みちのくの：『古今集』(七二四・恋四・源融)の有名な歌。「なくに」は「：でないことなのに」の意味の詠嘆表現。この和歌以下の文章は後人注ともいわれる。いちはやし：激しい。「いち」は程度がはなはだしい意味の接頭語。

【解説】 共立女子大学図書館蔵本『伊勢物語』(縦24・6cm横18・2cm)は、上冷泉為頼(川勝宗久による極め札有)筆の写本と思われる。為頼は江戸初期の公卿で、為満の子。従三位権中将に至る。寛永四年(一二二七)年に三十六歳で没している。和歌短冊が残っているが、それと比較する限りで本写本は別筆の可能性もある。題字は烏丸光広(外題・題策・中題策がある)。他本と同様、昔男の「初冠」から、「つひにゆく」男の臨終までの百二十五段からなる。業平の出自や境遇についてはすでに「4概説」で述べたのでそちらを、『伊勢物語』の諸本については「15補助教材の使い方」を参照してほしい。

「初冠」とは当時の男性の成人式にあたる。多くの王朝物語は男女の恋を中心に語られる。この「男」の「初冠」がまず描かれるのも、一人の男として女に対峙できる資格を得たということを示すのだろう。さびれた場所に美女を発見するという古物語の話を型を用いながら、男が想いの発露としての「和歌」を女に詠み贈る。「優美な女性をかいま見て、はげしく心を動かし、ただちに詠んだ恋歌を強調し、若々しい行為を称えて発端とする」(新編全集頭注)段であるが、「女はらから」を「男」にとつての「妹」と解すれば禁忌の恋ということができるのである。更に、これら諸段に女の返歌がなく、男の和歌のみである点も留意したい。読者は描かれていない「女」の返答を、「男」と「女」のその後を想像しながら読みすすめることになる。

10

次ページの現代語訳を手がかりに、『字典かな』を用いながら、本文を読んでみましょう。

280

徳のあまのまのちいさな

三條所のまゝとてあまつ所へて人にて

そまゝのとり

【現代語訳】昔、男がいた。想いを寄せていた女の所に、「ひじき藻」という物を贈るといって、

あなたが私を想って下さるならば、葎の生える荒れた宿でも共寝もしてほしいものです。あなたと私のお互いの袖を重ねて敷いて。二条の后が、まだ帝にもお仕えしておらず、並みの人であったときのことである。

【語注】懸想ず…想いを寄せる。恋心を抱く。ひじき藻…古来諸説あるが、現行の注釈書では、たいてい和歌のレトリックとして注目し、「ひじきもの」の隠し題として「ひじき藻」を解する。「海産物はありふれた品物ではなかった」（集成）。「今のひじき」（新編全集）。ただし、「といふもの」という言葉は貴族社会では聞きなれない世界に属する「物」であることを示す。むぐらの宿…「葎」は、つる草の雑草の名で荒廃した家の象徴。【大和物語】一六一段に類話を収載。二条后…二条后高子（八四二―九一〇）は藤原長良女。貞観八（八六六）年、清和天皇の女御となる。陽成天皇の母。藤原良房（清和天皇外戚）姪。「二条后」以下、後人注ともいわれる。ただ人…臣下の身分。

【解説】以後、二条后高子への思慕を語る段が続く。これら一連の二条后高子との恋を描いた章段を二条后章段とも呼ぶ。三段は小段だが、二条后高子の入内前、彼女に想いを寄せていた男の歌を中心に紹介する。語注で記したように、「ひじき藻」を贈ったことに關して、和歌のレトリックとして理解されることがほとんどであったが、【伊勢物語宗印段】において「中将（業平）、二条の後の所へ火敷として香をたくとき灰の上にうちしく物をやらるるとぞ。香はそらたきとて恋の媒となすものにや」と、和歌の「思ひ」の「火」と關連づけて考察している。その場合「ひじき藻」は、「恋」の演出として働く。この「女」に「男」への「思ひ」があったかどうかは描かれていないが、その後の段より二人の關係が想像できる。

11 変体仮名を読む 『伊勢物語』五段

次ページの現代語訳を手がかりに、『字典かな』を用いながら、本文を読んでみましょう。

いふなとこありきむいひのききわいりいともうて、ま
うがう研るいふよもえいふいふのちんあまもい
ちのちいふいふいふいふいふいふいふいふいふい
あうまうきうのいふいふいふいふいふいふいふい
あういふいふいふいふいふいふいふいふいふい
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふい

とよみりきいはいふくちをいそいでつるあつてきり
のちるあむつなつとをるをのすにあらあきんせうと
こそつまるをいそいできり

【現代語訳】昔、男が東の五条あたりにたいそう人目を忍んで通っていた。秘密の仲なので門から入ることはできず、子どもが踏みあけた土堀の崩れた穴から通っていたのだった。人目が多いわけではないが、密会が度重なつたので、その家の主人が聞きつけ、土堀の通路に毎夜、警護の者を置いた。だから男は女と逢うことができずに帰つたのだった。そこで和歌を詠んだ。

人に知られないように私が通っている恋の路を守っている番人は、毎夜毎夜、どうか眠ってほしい。と詠んだので、女はたいそう心を悩ませた。女の主人は、男が通ってくるのを許したのだった。

二条の后に密かに通っていたのを、世間の噂があつたので、兄弟たちが警護したのだつた。

【語注】東の五条わたり…東の五条に住む人を婉曲に表現。のちに二条后と明示される。東の五条…平安京の中央を南北に走る朱雀大路から東半分が東の京で、北の一帖から南の宮城までの、東西に走る大路のうち、五条の辺り(図1)。みそかなる所…人に隠れてひそかに通う所。かど…門。わらははべ…元服(成人)していない者。童男。童女。「わらは」「わらべ」と同義。築地…土を築き固めた堀。

物語を変体仮名で読むために

土塀(図2)。屋根がなく土手に近いので、崩れやすい。あるじ……ここでは五条の后(順子)と考えられる。人をすへて……番人を置いて。ゆるしてけり……男が通ってくるのを許した。歌の力が心を動かしたのである。兄たち……二条后の兄、藤原国経、基経たち。人しれぬ……古今集・恋三、業平歌。詞書は六段と大差ないが、「とよめりければ」以下は無い。

【解説】三段と同様、二条后と「男」の恋物語を描く章段である。こつそりと女のところに通う男を、女方はよく思わなかったのだろう、男が通つてこれないようにその通い路に番人を置いた。男が女にふさわしくない身分であるのか、あるいは女にはすでに決まった結婚相手がいるということか。男はそれでも女に逢いたくて和歌を詠んでよし、女は悲恋に思い悩んだ。それで、女方の主人は男が通うのを許したのだった。【伊勢物語】には、四〇段や四五段などのように、恋に悩んだ末に死んでしまう男女の話が収められている。五段でも女の恋死が予感されるところだが、ここでは、男の和歌が女の主人の心を動かしたことに注目したい。詠んだ和歌のすばらしさに対する褒賞として、相手の欲するものを与えるという話は説話の一つの型で歌徳説話というが、これもその話型にのっとった物語と解釈できよう。

さて、その一方で男の歌は、既に人に知られて番人が置かれている道にもかかわらず、「人しれぬ」ということなどから、古注釈では「幼稚な歌」と評されてきた。そこで竹岡評釈は、この和歌を物語から切り離して考えようとする。その場合、「通い路」は恋歌に見られるような「夢の通い路」「夢路」と解することもでき、そうであるならば、好きな女に夢の中でさえ女に逢えないのは、夢の通い路のなかに関守がいるからだと思立てて詠んだ歌とも考えられるのである。「人知れぬ」「よひよひごとくにうちも寝ななん」も、そのような場面状況で詠まれた歌だとすれば納得がいこう。歌物語と呼ばれる【伊勢物語】が、和歌をもとに物語を生成する様子の一端をここに捉えてみたい。



〈図1〉五条わたりの図。新編日本古典文学全集『伊勢物語』から転載



〈図2〉共立女子大学図書館蔵『絵入首書伊勢物語』五段より

12 変体仮名を読む 「伊勢物語」 六段

共立女子大学・共立女子短期大学 総合文化研究所紀要 第22号 2016年

四七ページの現代語訳を手がかりに、「字典かな」を用いながら、本文を読んでみましょう。

しー男阿のまりあえうまうからふふにうへをくしめむ
 うへをくしめむかへてわさきてふふまにふふまに
 阿く河うはふいてまきい草のうへをくしめむ
 露なかりうへをくしめむふふまにふふまに
 えふもたなあら所もてうへをくしめむふふまに
 阿くうへをくしめむ阿くうへをくしめむふふまに

【現代語訳】昔、男がいた。自分の妻にすることなど到底できそうになかった女を、何年も言い寄り続けて、やっとのことで盗み出し、たいそう暗いところまで逃げてきた。芥河という川のそばを歩いていたところ、草の上の露を見て、女が「あれは何？」と男に問いかけた。目的地は遠く、夜も更けたので、鬼がいる所とも知らずに、雷までひどく鳴り、雨もたいそう降っていたので、崩れかけた蔵の奥に女を押し入れ、男は弓矢を背負って戸口の前にいた。早く夜が明けてほしいと思っていたが、鬼はたちまち女を一口に食ってしまっていたのだった。「あれ」と言っただけでも、雷の音で男には聞こえなかった。だんだん夜が明けたので（見てみると）連れてきた女はいない。地団駄を踏んで嘆いていたが、何の甲斐もない。

白玉かしら、何かしらとあの人が尋ねた時、露ですよと答えて、自分が消えてしまったらよかったのに

この話は、二条后がいとこの女御のもとに宮仕えするような形でいたとき、たいそう美しかったので、男が盗んで背負って逃げたところ、そのご兄弟である堀川大臣、国経大納言が、まだ身分が低く、宮中に参内していた時に、ひどく泣く人があるのを聞きつけて、男を引きとめて后を取り返したのだった。そのご兄弟のことを、このように鬼と呼んだのだった。二条の后がまだたいそう若くて、后になる前の直人でいらした時のことだということだ。

【語注】女のえうまじかりけるを…女で、とても自分のものにできそうもないような女を。「の」は同格。男とは身分違いに高貴であることを暗示する。よばひわたりけるを…「よばふ」は「呼ぶ」の未然形に継続の意の助動詞「ふ」を伴った語。呼び続けるの意から、妻問う、求婚するの意に用いられる。からうじて…やつのことで。親には無断である。阿波国文庫本や歴博本には「からうして、をんなこゝろ（を）あはせてぬすみいで、」とあり、男の一方的な行為ではなく、女も承知の上での、共に愛し合う二人の逃亡だったとしている。芥川…摂津国三島郡（現大阪府高槻市）の芥河か。「はつかにも君をみしまの芥川あくとや人のおとづれもせぬ」（『伊勢集』四〇三）、「月影に我をみしまの芥川あくとや君がおとづれもせぬ」（『古今六帖』二八九〇）などの歌がある。女の兄たちが参内する途中に助け出したと語る末尾の注記から宮中の芥（こみ）を流す大宮川（京都一条から内裏に流れ入り、二条で流れ出る）の異称とする説、物語の虚構性を重視する立場から架空の河とする説もある。行き先おほく…「おほく」を「とほく（とをく）」とする本も多く、

物語を変体仮名で読むために

真名本も「行前遠」とする。この当時、行き先を「多し」「少なし」とも言った。目指すところは遠く、の意。一心に先を急ぐ男には、女の問いかけに答えてやるだけの心の余裕は無い。胡籙…弓を入れて背負う筒形の道具。鬼…『和名抄』には、「鬼人死神魂也」とある。霊物で人を食うとされる。荒れた古い家には鬼が住むと伝えられている。あしずり…悔しさや腹立たしさのあまり、地面に倒れ転がって足の裏をこすりつける動作(図3)。「立ち走り 叫び袖降り 臥いまろび 足ずりしつ…」(『万葉集』一七四〇・水江の浦島子を詠む一首)などがあり、立ったままの地団太ではないと考えられる。『源氏物語』では宇治大君の死や浮舟の入水自殺未遂に際し、残された者が「足摺」したいほどの悲嘆にくれる場面があり、死別と足摺の密接な関係が予想されてくる。白玉か…「白玉」は真珠のこと。44ページ3〜4行目を受けての歌。雷光を受けて白く光る「露」を「白玉」に置き換えたか。「白玉」は涙の比喩ともなることから、本来は「それは白玉でしょうか、と人が尋ねたとき、悲しい心のわたくしは、浮かぶ涙を露と答えて、露のようにではなく死んでしまったらよかったのに」という意味の歌を用いてこの段は構成された」とする(『日本古典文学全集』など、本来は物語と無関係の歌が物語化されたとする説もある。「露」「消え」「新撰和歌」四、第三句「とひしより」。「新古今集」哀傷・業平。いとこの女御…藤原明子。高子の父長良の弟良房の娘。良房が染殿と呼ばれる御殿に住んでいたため、染殿后とも呼ばれる。仕うまつるやうにてゐたまひけるを…阿波国文庫本・歴博本・伝民部卿局筆本に「つかうまつりひとのやうにて」とあるように、女房に準ずるかたちで邸にいた。『源氏物語』蜻蛉巻に、式部卿官の死後、娘の姫君が今上帝女一宮に出仕する姿が描かれるように、親と死別するなどして後見を失った高貴な女性が女房として上流貴族の邸に出仕することがある。高子の父・長良は八五六年に没した。高子は父の死後、その弟良房に引き取られ、いとこの染殿后に仕えるようにして過ごしていたと見ることができる。堀川大臣…藤原基経。長良の三男で二条后の兄。叔父・良房の養嗣子となり、のちに摂政関白太政大臣となった。昭宣公。国経…長良の長男。高子の長兄。ここで弟の基経の名が先に呼ばれたのは、官位が国経よりも高かったためか。あるいは、基経は良房の養嗣子であり、同じく高子も良房に後見されていたことから、一番近い立場の兄弟として真っ先に名が挙がったと考えてもよいかもしれない。下らう…下臈。官位の低い者。下級の者。

物語を変体仮名で読むために



〈図3〉『続日本の絵巻8 華厳宗祖師絵伝』(中央公論社)より転載



〈図4〉共立女子大学図書館蔵『絵入首書伊勢物語』六段より

【解説】男は、身分違いのためとても手に入らないような女を「かろうじて」盗みだし、「芥川」まで逃げてきた。二人がたどり着いた場所が「鮑く」を連想させる名の河であったこと、また「芥」じたいが動物や人間の死骸などを含めた諸々の廃物を想像させ、不気味で汚いイメージを抱かせる語であることが、今後の二人の破局を暗示する。川と雷雨が二人の行く手を阻む闇の中で、弓胡録を背負って夜明けを望む男の恐怖と焦りは、この場で最高潮に達していたことだろう。しかし、やつのことで盗んできた女が自分の知らぬ間に鬼に食われてしまう。男はあしずりをし、和歌を詠んだが女は戻ってこない。歌徳説話はここでは成立しなかった。「これは」以下に物語の真相が明かされ、これ以降『伊勢物語』は二人の恋を過去のものとして語ることになる。

[illegible]

物語を変体仮名で読むために

伊勢物語新釋一巻

初段

じう男はわがまゝいふうへなほけみやう
里はあがすゝてたはいさなりわ

こいじうあゝ男春日は里は領所のほろやうへなほ
しゝまゝなりてすゝてたはいさなりわ
腰断は元服しゝやうへなほけみやう

とろのちろ

あはれろ

たはろあふろの

みろはろ

ね

物語を変体仮名で読むために

14 付録——校訂本文と比較してみよう

現行の注釈書はいろいろあるが、新編日本古典文学全集（小学館）の本文も、研究史をふまえ、校訂された本文の一つである。本文は、「」や読点、句点を付し、読みやすくしてある。どこが違うか考えながら、6～12までの教材本文と比較してみよう。

竹取物語

いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。名をばさぬきのみやつことなむいひける。その竹の中にもと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中ひかりたり。それを見れば三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

翁いふやう、「我朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめり」とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。妻の姫にあづけてやしなはず。うつくしきこと、かぎりなし。いとをさなければ、籠に入れてやしなふ。

伊勢物語初段

むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、

狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。

この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫掬の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず

となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきことともや思

ひむ。

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

伊勢物語二段（参考）

むかし、男ありけり。奈良の京ははなれ、この京は人の家まだ定まざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし。それをかのみめ男、うち物語らひて、かへり来て、いかが思ひけむ、時は三月のついたち、雨そはふるにやりける。

おきもせず寝もせて夜を明かしては春のものとてながめくら
しつ

伊勢物語三段

むかし、男ありけり。懸想じける女のもとに、ひじき藻といふ
ものをやるとて、

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじきものには袖をしつ

つも

二条后の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人にておあはし
ましける時のことなり。

伊勢物語四段（参考）

昔、東の五条に、大后の宮おはしましける西の対に、すむ人あ
りけり。それを、本意にはあらで、心ざしふかりける人、ゆき
とぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけ
り。あり所は聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、
なほ憂しと思ひつつなむありける。またの年の正月に、梅の花ざ
かりに、去年を恋ひていきて、立ちて見、ぬて見、見れど、去年
に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月のかた
ぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる。

物語を変体仮名で読むために

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身に
して

とよみて、夜のほのほのと明くるに、泣く泣くかへりにけり。

伊勢物語五段

むかし、男ありけり。東の五条わたりに、いと忍びていきけり。
みそかなる所なれば、かどよりもえ入らで、わらはべの踏みあけ
たるついひぢの崩れより通ひけり。人しげくもあらねど、たび重
なりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に、夜ごとに人をす
ゑて守らせければ、いけどもえあはでかへりけり。さてよめる。

人しれぬわが通ひ路の関守はよひよひごとのうちも寝なむ
とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじ許してけり。二
条の后に忍びて参りけるを、世の聞えありければ、兄たちの守ら
せたまひけるとぞ。

伊勢物語六段

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよば
ひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きに来けり芥河
といふ河を率ていきければ、草の上に置きたりける露を、「かれ
は何ぞ」となむ男に問ひける。ゆく先おほく、夜もふけにければ、

鬼ある所ともしらで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に、女をばおし入れて、男、弓、胡籬を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつゝゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわざに、え聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消えなましものをこれは二条の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄、堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて、内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、後のただにおはしける時とや。

15 補助教材の使い方

変体仮名を学ぶにあたり、仮名字典は必需品である。さまざまなものが市販されているが、『字典かな』（笠間書院）はおすすめの一冊だ。しかし、それを持っているだけでは変体仮名を読めるようにはならないから、変体仮名習得には予習・復習が欠かせない。本テキストには自主学習のために練習問題を載せているが、変体仮名を幅広く学びたい学生のために、補助教材をタイプ別に紹介する。

1. 漢字のくずし字をマスターしたい人へ

・『江戸のくずし字学習図鑑 巻の二 基本漢字編』東洋書店
……書いて覚えるタイプの教材。江戸時代に作られた図鑑『訓蒙図彙』から頻度の高い六〇文字がピックアップされている。絵入本なので楽しく学習できる。

・『くずし字解説辞典普及版』東京堂出版……漢字の第一画目のかたちから検索できる。巻末には字例によるくずし字検索一覧が八頁でまとまってあり、便利。

・『異体字解説字典』柏書房……現行漢字の総画数、音訓からくずし字を検索できる。平仮名、片仮名についても同様。

物語を変体仮名で読むために

・『五體字類（改訂第四版）』西東書房……漢字の異体字を調べるには外せない字典。

2. なかなか変体仮名に慣れない人へ

・『変体仮名とその覚え方』仮説社……明治時代の寺子屋の教材を読むことから始まる。現行のひらがなに近くくずし字から、段階を追って学習できる。

・『妖怪草紙くずし字入門』柏書房……江戸時代の絵入本『妖怪草紙』を簡単な文字から段階を追って学習していくもの。一冊で一〇〇文字をマスターできるようになっている。妖怪の画がおもしろいので楽しく学習できる。

・『検定変体がな改訂版』武蔵野書院……初級・中級に適した教材。
・『古筆切で読むくずし字練習帳』新典社……寂連や堯孝など、展示会で見かける人物の筆跡で変体仮名を学ぶ。書道に興味がある人、中古・中世の写本を読みたい人におすすめ。

3. もっと読めるようになりたい人へ

・『変体仮名の手引』武蔵野書院……用例句での見本もある。

・『くずし字で「おくのほそ道」を楽しむ』角川学芸出版……松尾芭蕉「おくのほそ道」を変体仮名で読めることを目指した教

材。書き込み式になっており解説も詳しく書かれている。ほかに「くずし字で「徒然草」を楽しむ」、「くずし字で「東海道中膝栗毛」を楽しむ」、「くずし字で「百人一首」を楽しむ」がある。

以上、既に出版されている教材を紹介したが、いちばん力がつくのは、実際に写本や版本で物語を読んでゆくことである。ただ、たいていの本は貴重書として手にとることが難しい場合もあるもので、まずは影印本からはじめるとよいだろう。先にもふれたように、本には個性があり、仮名表記だけでなく、本文には異同もある。様々な伝本を持つ「伊勢物語」の影印本を比較しながら読むだけでも、変体仮名を読む力を培うことができる。

4. 「伊勢物語」の様々な伝本

現在まで伝わる写本や版本を、伝本と呼ぶ。比較的短い多数の章段によって構成される「伊勢物語」は、以下に述べるように、形態が相違する（章段に差異がある）伝本が、いくつか存在している。

まず、「昔男ありけり。その男伊勢の国に狩の使いにいきけるに」（定家本六十九段）から始まり「昔男あづまへ行きけるに友だち

どもに」（同十一段）で終わる小式部内侍本と、「昔男うひかうぶりして」（定家本初段）から始まり「昔男わづらひて」（定家本百二十五段）に終わる朱雀院本の二種類に大別できる。朱雀院本のひとつが、室町時代に連歌師宗祇による定家称揚によって通行本的位置づけをされた定家本である。現行のほとんどの注釈書は定家本を用いている。

さらに、朱雀院本系統の諸本を細別すると、百二十五段を有する定家本、定家本との間に章段の出入りのある真名本、百二十一段から成る大島本、百十五段から成る塗籠本、百二十四段から成る為家本などがあり、以上を「略本」と呼ぶことがある。

また、初段から百十五段までと、現在は伝わらない業平自筆本から十四段を採った百三十四段から成る日本大学図書館本、神宮文庫本など、また定家本には無い十段を加えた百三十六段から成る泉州本は、「広本」と呼ばれる。

そのほか断片しか残されていないが、六条家本、皇太后宮越後本などが確認できる。

これら諸本のほかに、書写者の別による分類もある。古人は本を書写する際、一言一句間違えないことはもちろん、文字の形、一頁に収まる行数、文字数まで忠実に再現しようとしたが、誰の手による本を写すかということも重要な関心事であった。

代表的なところでは、鎌倉時代の書写に関わる伝為相筆本、伝慈鎮・為家両筆本、伝良経筆本、室町時代の書写本である三条西実隆筆本、冷泉為和筆本がある。また江戸時代には絵入り版本も流通し、なかでも江戸初期に作られた嵯峨本『伊勢物語』は後代に大きな影響を与えた。これら伝本によって伝えられた古人の筆遣いは影印本に収められており、手軽に見ることができる。

5. 影印本紹介

影印本とは、書籍を写真に採り、製本、印刷した書物のことを言う。写本や版本の影印本を見ることができ、それが書かれた当時の文字や絵をそのまま見ることができる。1に挙げた伝本のほか、江戸時代以降に作られた版本についても、多くの影印本が出版されている。以下に、共立女子大学図書館で閲覧できる影印本を挙げる。

・『影印本伊勢物語』片桐洋一編、新典社、一九六七年

・『伊勢物語』慶長十三年刊嵯峨本第一種』片桐洋一編、和

泉書院、一九八一年

・『伊勢物語』田坂憲二編、在九州国文資料影印叢書、一九七九年

・『竹取物語・伊勢物語』中島あや子・田坂憲二編、一九七
物語を変体仮名で読むために

九年

・『伊勢物語』東海大学桃園文庫影印刊行委員会編、一九九一年

その他、比較的手軽に入手できるものに、冷泉為知筆『伊勢物語 御所本』（鈴木知太郎編、笠間書院、一九七一年）がある。

また、オンライン古典籍も積極的に活用したい。たとえば奈良女子大学学術情報センター「伊勢物語の世界」(<http://www.lib.nara-wu.ac.jp/nwugdb/iseindex.html>)では、朱雀院塗籠本と真名本のほか、古注釈を見ることができる。また、学習院大学デジタルライブラリー(<http://glim-el.glim.gakushuin.ac.jp/>)では伝定家筆天福寺系統古写本（定家本ができる以前に存在した本文の写本）が、関西大学図書館電子展示室(<http://web.lib.kansai-u.ac.jp/library/etenji/ise-monogatari/ise-top.html>)では、嵯峨本以降に作られた絵入り版本『改正伊勢物語』が公開されている。